

「他者とは何か」と『日本文学における〈他者〉』との距離

——『日本文学と他者』を論じることの陥穽

稲賀繁美

「こんなにも違う」といふことは、「こんなにも同じい」といふことだ。縦にも横にも、わたしたちのころは、もつともつと、広がらねばならない。一人でも多くの人を理解しよう。古いことを通じて、一つでも多く、新しい意味を学び取ろう。

——鉄勤平 alias 金素雲 『三韓昔がたり』(昭和十七年刊、復刊、講談社学術文庫)

問題設定について

「他者とは何か」。これが編者から戴いた題名である。『日本文学における〈他者〉』と題される予定の書物の導入となるべき文章を所望されたわけだが、実はこの問題については編者の鶴田欣也自身に「近代日本文学の西洋人像」(鶴田・平川編『内なる壁』TBSブリタニカ、一九九〇年)という

見事な模範回答が既にある。同様の論法をさらに敷衍して、「近代」に限らぬ領域に応用し、「西洋人」から「外国人」一般に視野を広げた一稿をなすことは、あまりに安易であろうし、編者の望むところとも思えない。五八〇頁にのぼる大著『内なる壁』が粗雑な一般化を阻む各論を縦横に展開している以上、屋上屋を重ねてもむなし。むしろこの編著の副題にあつた「外国人の日本人像・日本人の外国人像」という問題設定では掬えない何かが、今回の企画にある「他者」という言葉に積極的に込められている——べきな——のではあるまいか。そうした想定ないしは誤解から発する妄想を以下に述べてみたい。

筆者がここで問題にしたいのは、「他者とは何か」という一般的な設問と、「日本文学における〈他者〉」というより限定された規定とのあいだに横たわる、看過すべからざる距離である。なにも両者を橋渡ししようというのではない。かえって感覚麻痺に陥りかねない辻褄合わせの代わりに、むしろ両者の落差、いや両者のあいだにある不気味な振れないしは隠微な矛盾をあらかじめきちんと再確認しておくことが、導入なるものの責務であろう。編者ならざるものとして、身の程知らずは元より承知であるし、本論に収められた諸作品論考とあるいは齟齬をきたすような物言いになりかねぬことも覚悟している。だがそれは、本書の射程と限界、さらにはなお今後の研究に待つべき未開拓の領域がどのあたりにあるか、目星をつけるためにも必要な準備作業であり、また本書本論への最低限の前提ともなるだろう。

以下、いわゆる日本文学通ではない読者を想定して、「他者」たる彼／彼女らにたいして(たと

えば英語で) 説明をする場合に、日本の常識がどういった具合に通用しないかを露呈させることを眼目にして、問題を概観したい。個々の作品についての知識も前提としないことが、「ゲームの規則」となるから、内通者にしか意味をなさないような具体例の引用はあらかじめ意図的に放棄することを、お断りする。

異者と他者と——問題の再確認

『内なる壁』の巻末に収められた論文から出発しよう。それは、大嶋仁の「『異人』の論理と『他者』の倫理」と題された論文である。ここには「他者」定義への明快な疑義が提起されている。例えば「日本人／外国人」という対立項は「自分たち／非自分たち」という二分法——それを大嶋はトーテミズムと呼ぶ——から割り出される分類図式だが、それは「日本文学／外国文学」、「日本史／世界史」といった図式にも反映している。その論理は「同化／排除」、「理解可能／理解不可能」の対、レヴィ・ストロースの用語ならば嗜好可能か口にしても吐いちゃうかの差がなす、さまざまな水準に横滑りする一連の系列である。「異人さん」が幕末・明治において「浄／不浄」の区別のうえで情念・感覚的に「忌む」べき範疇に属しながら、それが理念としては「近代化」の模範として「懂れ」をも荷ったところから生まれた理性と情緒との振れや葛藤は、戦後の米軍占領で強迫的に反復され、それが幾多の文学作品に恰好の題材を提供したことは繰り返すまでもない。それはまた西欧文明の自己中心的な「正統と異端」、「文明と未開」、「普遍と特殊」という図式の裏返し

として、自己を否定的に定位するしかなかった「近代日本人」の屈曲の原点をもなしていた。だがここで大嶋に倣ってレヴィナスの「他者論」に踏み込むことはしまい。⁽¹⁾ さしあたり「普遍主義」も「日本特殊論」も、ともに「他者」を省みぬ自己中心的な発想(同書五六四頁)というコインの両面でしかなかったことを確認しておけばそれで足りる。

それがみずからの普遍を信ずるがゆえであれ、みずからの特殊の純潔を守るためであれ、いずれにしても「異物の排除」というこの論理で排除される対象を「異者」と定義し、「他者」とは区別される何者かを指す。文化人類学などという「他者性 otherness」はフランス語では今日通常「alterité」を用いるが、politically correctであることの自己宣伝により自己保身を図るためにこの用語を盾に論じられているのは、ほとんどの場合、「異者」の論理、つまりウチカソトかの論理で処理のつく問題ではなかったか。ないし「他者性」の問題はいつのまにか「異者」の論理へとすり替えられ、手なずけられ、矮小化されてきたのではないか。日本人と外国人、普遍と特殊、植民地主義者と被植民地民、征服者と先住民、支配者と被差別部落民、常民とマレビト、内地民と外地民。外国人労働者問題、慰安婦損害賠償問題、働く女性の人権問題。そうした図式や問題を立てたとたん、それが宥和政策であれ戦闘的原理主義であれ、反対にエスニシティーのゲッター化、カルトの孤立化に走る迫害妄想的逃避であれ、いずれも純粹培養と異物排除の論理へと押し込まれ、ウチカソトか味方か敵か、正義か悪かの神経症的にまで潔癖な分類の悪夢へと狂奔してゆく——ま

さに映画『エイリアン』の描く世界だ。そうした〈異者〉の論理によって蹂躪され、しかとその姿も掴めぬままに無菌処理されてはひそかに、あらかじめ抹殺されてきたものを、ここであらためて〈他者〉と定義し直してみてもどうだろう。それが具体的にはどのようなもの——でありうる——か、以下おいおい明らかにしてゆこう。

I

もとより日常的・常識的に考えてみても、文学の「他者」とはあまりに多様である。それは到底日本語としては承諾できない直訳調で闖入し、制度としての文壇からは無視されてきた西欧哲学文献でもありえれば、「日本における外国文学」全般でありえ、また小説の登場人物として描かれた「異人さん」としての外国人の姿でもありえよう。また日本語で著述をする「外国人」や外国語で著述する「日本人」もしばしば越境する〈他者〉的存在であるけれど、これらいずれも「ウチ」か「ソト」か「マレビト」か「被差別部落民」、「先住民」と片付けられてしまう限り、柄谷行人の区分に従えば「異者」でこそあれ「他者」ではありえない（『批評空間』一一号、福武書店、一九九三年、三〇頁。すでに明らかのように、この柄谷の「異者」、「他者」の定義もわれわれが先に示した提案と矛盾するのではないだろう）。

「文学」の〈他者〉ないしは「物語」？

作品のレヴエでも著者のレヴエでもないならば、では文章内部というレヴエでの〈他者〉とはいえば、中上健次が提唱したかに伝えられる「物語」と「文学」の区別がある。日本古来の「物語」に「文学」という異物を導入したのが小林秀雄の罪科であるか否かはさておき（ちなみに小林を筑版近代日本文学全集に含めるにあたって論争のあったことは想起されてよい。当時の「日本文学」にとって小林はもちろん〈他者〉だったわけだ）、「天才的と呼びたいほどの強引な適合性」（阿部良雄『現代性の時間的構造をめぐって』、『文学』一九八七年十二月）を發揮するこの区分は、小林流の「文学」を「物語」によって解体する闘争の現場として自らの「小説」の営みを規定する。そしてそれは、遡れば小西甚一『日本文学史』にある「物語」と「小説」の区別にも横滑りに振れて通底しうる（講談社学術文庫、五五頁）。言い換えれば西洋わたりの小説が「閉じた作品」であるに對して、物語とは「開かれた作品」であるという通念を逆手に取って、「物語」の規範性を「小説」のポリフォニーの内に脱構築し、そこに〈他者〉性を露呈させようとする目論見だ。⁽³⁾

『源氏物語』は世界最古の「心理小説」などとも呼ばれるが、これまた作者とされる女性が個人の意志で五四帖をまとめた確証が必ずしも得られぬばかりか、むしろその伝承過程を考慮にいれるならば、それが日本における詩歌の規範的典拠としてさまざまに異本や抜書、取舍選択から読解にまつわる秘伝を生産させつつ、『古今和歌集』という古典主義と『新古今和歌集』という新古典主義との間を通過して成立したうえ、謡曲から俳諧、香合こうあわせの教養主義、さらには狂歌というパロデ

イーの局面すら通り越して「修紫」、はては谷崎、与謝野、円地、田辺から橋本治らの「近代作家」(?)のみならず大和和紀にいたる数々の現代語訳という名の翻案まで生み出してゆくなかで「叙事詩」にも匹敵する超個人的な権能を獲得し、アーケタイプとして日本の教養の離合集散という壮大な「トランステクスチュアリティー」の流れをなす「インターテクスト」へと成長を遂げたともいえよう。だが制度としての「小説」に対する〈他者〉である日本の「物語」は、それゆえ同時に内部に閉じた再生産と反復とに自足して、〈他者〉を知らぬという二重拘束の逆説にも囚われがちな存在となった。

内部と外部、自他の区別というものを作品のレヴェルで主張しようとするような、今日なお強固に残存する西欧近代のイデオロギーと相容れず、これを骨抜きにしかねない「内なる〈他者〉」の営みこそ「物語」であるとするならば、これは比喩としてはポリフォニーを排斥することで純粋性の虚構のうちに発展した西欧近代音楽とその外部との関係にも類比できて(ポルトガルのファドと安来節の歌いだしは区別がつかない)、なにも一個日本の特殊事情とはいえないが、とまれ「和歌」の外部に寄生することから徐々に発展した「物語」の起源——つまり和歌の〈他者〉というその発生様態——とも矛盾しない融通無碍な錯綜体を、あらためて自律した「文学」として困い込んだところから、さらにいまひとつ別個の虚構が捏造された。

「近代日本文学」とその〈他者〉

今日の日本文学研究の領域内に取り込まれた明治初期の文筆家たちは、はじめから「近代作家」といった範疇においてのみ理解されるような運命を甘受した人物たちだったろうか。陸軍軍医総監・森鷗外の遺書は論争の種であるが、軍人の生涯と一個の作家としての営みとの落差のなかで、異国の少女との許されぬ恋を昇華させるところから出発したその「文学」活動は、今日の日本文学からは半分はみ出た高級官吏の履歴を捨象した虚構にすぎまい。夏目漱石とて東京帝国大学英文学教授という世間的栄達にたいする逃避として「作家」の人生を選択したにすぎまい。福沢諭吉を作家という範疇にくくるのは、今日からみれば不自然であろうけれど、当時のベストセラー作家であったことは否定しがたい。明治国家建設にたいして一定の距離をとって私塾を創設し、いわば実用渡世文学とでも称すべきジャンルを導入したスタンスは、逆に「文学」の営みが今日の常識とは別の未分化な広がりを持っていたことを証しよう。とりわけ注目すべきは岡倉天心であって、その「文学」はまさに国家事業の挫折に対する補償作用として天心の精神の平衡を司っていた。いずれも日本語ではない言葉で著述をなしたか、その方面で先駆者的な役割を演じたという意味でも、日本(西)文学という後世の枠には収まりきれぬ変動期ならではの傑物だったはずなのだが、日本文学という「制度」内に取り込まれるや、そうした鬱勃たる〈他者〉の気概は見失われ、あたかも最初から「日本人作家」となることを約束されていた文人であるかに変身し矮小化され、特殊日本の「代表」へと転落してしまう。

日本の近代化とは何だったのか。この問いが文明論や歴史学の領域で国際的な視野から研究され

ようという時代に、日本の作家の貴重な経験がいまなお特殊日本的な文芸批評の閉ざされた世界に幽閉され、本来の越境性をあらわにしない傾向がまま見られるのは、〈他者〉にたいしてあまりに閉ざされた感性を制度化してしまった、従来の欧米における東洋学と、西欧の模倣として出発したこの国の国文学研究の守備範囲とのあいだに知らぬ間に巨大な空隙が広がってしまったためでもある。そして日本における外国文学研究者にはこの空隙を埋める責務があるはずだという認識も到底生まれるべくもなかった。外国文学研究は、もっぱら専門とする外国の国文学研究への参入を至上命令とし、その亜流にとどまっている現状への忿懣を内攻させるか、輸入翻訳紹介にその全精力を傾注してきたのだから。

最近九二歳で現役のまま、その志し半ばにして世を去った島田謹二の構想した「比較文学」は、以上のような問題意識に色濃く染め上げられていた。翻訳、翻案に苦闘した明治文学者たちの実相とは無縁に、あたかも〈他者〉を知らずにおのずと内的な必然によって「近代日本文学」が生成・発展したかに事態を物語る「国文学」は、ディシプリンとして、〈他者〉の存在に開かれた感性を抑圧し抹殺することではじめて成立しえた虚構¹¹ 挙行ではなかったか（島田「私の比較文学修業」『比較文学研究』六四号、東大比較文学會、一九九三年、一三五〜四一頁）。

世界文学の他者（？）としての日本文学

今度は反対に、世界文学から見た「日本文学における他者」性を一瞥しよう。はたして日本文学は世界文学の〈他者〉なのか。〈世界〉という松舞台上で上演されるに値するものと認知され翻訳された日本文学作品は、〈世界〉の一員に一応仲間入りしたのだからとりあえずいいとして、その後には日本語以外の世界ではどうにも生存できそうもない文学（？）が、莫大な量で控えている。〈世界〉から見ればこれは理解すべき手段——翻訳——を欠いた存在である以上、存在しないに等しく、また事実存在を必要ともされていないながら、〈日本〉という領域の内部には依然棲息しているらしいという事実のみが漠然として知られている。すなわち〈異者〉にとどまっている特殊日本的な〈文学〉だ。

これは真に実力ある学者にはおあつらえむきの処女地であって、フランス切つての日本文語遣い、セシル、アンヌのサカイ姉妹が、姉は日本の大衆文学、中間文学で、妹は口承文学たる落語の研究でそれぞれフランスの国家博士号を取得し、その研究がフランス語で出版されたのも象徴的な事件といつてよい。余人をもってはアクセス不可能な対象を攻略することで、みずからの権威の反論不可能な裏付けとし、対象の特殊性を転じて論文の普遍性の証しとする戦略——つまり〈異者〉の同化によって自らの普遍性を立証する「文明の作法」——がここで模範的に——つまりフランス東洋学の伝統に忠実な個人的妙技によって、フランス東洋学の伝統の旧弊たる文字偏重・古典偏愛嗜好を乗り越えてみせるという周到な手際によって——演じられているからだ（Cécile Sakai, *Histoire de la littérature populaire au Japon*, 1987; Anne Sakai, *La parole comme art—le rakugo japonais*, 1992, とともに Paris, Harmattan)。

ではこうして〈世界〉の仲間入りした日本文学とは何だろう。さまざまの古典や諸国民の文学たちと横並びした以上、それはもはや〈異者〉ではないし、理解可能な形へと鑄直され、同化している限り〈他者〉でもなからう。そこでなお〈他者〉性を發揮するものがあるとすれば、それは日本語の世界でその作品が受けていた蓋然的な理解と、翻訳を通じてなされる理解との間に生まれる齟齬ないし距離、もはや〈自分〉としての完結性を一義的には主張できなくなるその危うさのなかに認められるものではないか(たとえばブレヒトの翻案した謡曲)。

ここで提唱したい〈他者〉とは、もとよりある地域的一視点(〈日本〉、〈フランス〉)ないしは普遍性を標榜する観点(〈世界〉)から一義的に定義されるようなものではない。さまざまに異質な視点や歴史的条件(唯物史観)の交差に否応なく晒されるなかで、もはや一義的な像を結びえなくなった存在、それに対すると、観察者の側も自らの〈己〉の保証が否応なく揺らぐような存在——その実体というよりはむしろ掴みたい現象なり機能なりの様相を〈他者〉と呼んでおきたい。

問題はしたがって〈他者〉のつくる領域を画定して、そこに属する文学作品を召喚して分析に付することではなくなる。〈他者〉とはリサーチの領域の画定を許すような固定した名詞ではありえず、むしろ安定した枠に収まらず越境しては逸脱を繰り返し、解剖台や展翅台のうえに固定され、検死に付されることを拒みつつける——ないしは固定されれば変質せざるを得ず、もはや〈他者〉とは呼べないような——動詞的な運動の謂であらうから。そこでの問題は、〈他者〉なるものが出現する仕組みがいかにして〈文学〉といわれる営みと連環して、その内部と外部との境界の曖昧さを際立たせつつ講じられ、〈他者〉の出現がいかなる事件として文学の内外で認識されたりされそこなったりしたかの軌跡を追うことだ。それは同時に解読者の側にいかなる変容を強いたか、という相互作用の様態を記述する作業ともなる。でなければ〈他者〉と遭遇したことにもなるまいから。いまやようやくわれわれはここで考察すべき〈他者〉へと接近してきたようである。

II

以上のような予備的考察を経たうえで、それでは「日本文学における他者」とはいったい何を意味しうるのか、しえないのか。突き詰めたことをいえば、「他者」として論じられるような対象はもはや「他者」とはいえない、というラディカルな「他者」定義も可能だろう。その論法でゆけば、「日本文学における他者」とはそれだけで形容矛盾だという屁理屈も可能になる。「他者」である以上「日本文学」において「は間違っても存在するはずはなく、かりに存在するとすれば、それはもはや「日本文学」における他者」とは呼べまい、と。先ほどからの定義でいえば、「日本文学」において存在するのは、もはや〈異者〉へと鑄直された、〈他者〉の「残骸」ないしは「屍」にすぎまい、という論法である。

日本文学「における」他者?

いうまでもなく、この屁理屈は、「日本文学における他者」という問題構成が常識的に思い抱かせる外延が、いかなる抑圧の産物であるかを明るみにだすための、とりあえずの暴挙にすぎない。ではその隠された抑圧とは何か。三点に絞ろう。まず〈他者〉を考察するのに「日本文学」という枠はかならずや抵触する性質のものであることを、論理的な必然として内包していたこと。国民文学という虚構が信仰の対象として機能しえた時代に限って、その臨界点に設定できた、定義からしてすぐれて周辺の問題たる「他者」は、「他者」たる以上、文学テクストの表象の内部におとなしくよい子で坐っていてはくれない。それがまっとうな〈他者〉ぶりを発揮しはじめると、土俵だったはずの「日本文学」という規定が破綻する。その綻び目から現われるのは、もはや国境とは、それを乗り越えることにはか意義を見いだすまいという多重国籍、多言語状況、クレオール的交錯のなかに織り成される『越境する世界文学』（河出書房新社、一九九二年）の躍動ぶりだろう。

ただし衝突や抵触の発生するような障害をわざと畏として設けて、そこに何がひっかかるかを息を潜めて待つ知的余裕は、これを否定すべきではない。ボーダーレスゆえに発生した予期せぬ〈他者〉を捕まえるにも、「国境」はかえって絶妙な策略かもしれないのだから。それだけでも本書の「畏」にはまっとうな存在意義があることになる。

第二にその畏に何がひっかかるのだが、もはや目標が「文学」のテクストに描写された「外国人」や男性主人公にとっての永遠の謎たる「女性」や、「恋愛」、「風景」、「三人称」の発明やら、異界から登場した異形の霊たちの類型学、「向こう側」の構造解明といった次元に限定できないことも明らかだろう。むろん形式としては日本文学における漢詩、漢文訓読やルビの機能、外来語と人称表現の変貌、言文一致体の発明、韻文と散文の混交、挿絵本におけるテクストとイメージとの相互作用、日本オペラ事始、新劇出現、「標準語」の設定による「方言」の圧殺、さらには戦後における正漢字正仮名遣の「弾圧」などが、知られざる〈他者〉出現の装置として考察されねばなるまい。

またこれに連動するであろう内容に関して、国境線上に摩擦を起こし、傷つきながら往還するさまざまな形象を〈他者〉として把握する感性が要求されよう。ポスト・コロナル状況下、大都市圏に向けて激動する東南アジアという怒濤のうえに漂う世間知らずの浮き島、日本でも、経験も準備もないまま突如貢献を要求されたPKO参加といった文脈での〈他者〉との遭遇を書き付け、読み抜く想像力が要求されよう。「現実の社会に生きる重さと国際環境を反映する緊張を表現した小説が見られなくなった」（大江健三郎「文芸時評」『朝日新聞』一九九二年六月二六日）ともいわれる最近の「日本文学」は、ここでも「五五年体制」に安住し、特殊日本の文壇事情に自足して貧血に陥り、近くは在日朝鮮人、韓国人、中国人作家というかつては「日本」内部での生を強制されもした境界人をはじめとする「他者の声聞く態度失い」（同上）、世界の現実から置いてきぼりを食っている。

最近では先住民への植民地主義的偏見の戯画だとの批判もかまびすしいアレホ・カルペンティエールの『失われた足跡』、ローレンス・ヴァン・デル・ポストの『内奥への旅』、ポール・ボウルズ

の『天蓋の空』に匹敵する〈他者〉経験は、「日本文学」の枠のなかでは——「大陸的文学」、「樺太文学」とか「南洋文学」などと呼ばれたその植民地文学の「成果」をも含めて——ついに大鹿卓の『野蠻人』かその兄、金子光晴のパリ放浪でなければ横光利一の『旅愁』の挫折としてしか結実しなかったのだろうか。「日本人」の「日本語」による「日本人」のための「日本文学」に〈他者〉を求めるのは、所詮むなししい悪あがきなのだろうか。いうまでもなく、これは設問そのものが間違っているにすぎない。「大東亜共栄圏」の時代ののちにまた再び、今日の日本語文学はもはや国内消費の日本人独占物ではないものへと変貌しつつあるからである。

III

こうしたなかで第三にとりわけ意識したいのは翻訳媒体を介しての〈他者〉の出現である。すでに見たように、日本における翻訳は外来の文化を移入する手段として、古代このかたもつばら受け身の姿勢でなされてきた。それは外来の普遍的な価値を特殊な日本へと招来する吸収の営みであり、たとえ本地垂迹説にせよ逆本地垂迹説にせよ、同様の構造を居直って転倒させたにすぎない。これに対して帝国主義時代以降、西欧における外国文学の翻訳には、翻訳されることで、ある普遍的な価値への参入が認められるという付加価値がついた。

〈他者〉としての認識装置

今日でこそいくつかの自然科学の領域では、日本語に訳されたか否かが Citation Index への掲載などとともに、アカデミックな価値の指標として「国際的」に公認されているという。だがアラブ／イスラーム文化研究がヨーロッパ諸言語で発表されることに「学問」の権威に名を借りたあからさまな文化的篡奪を見て、これを声高に糾弾したのが「オリエンタリズム」のエドワード・サイードだった。公認された学術上の公用語の選択が、言語による学閥支配へと隠微に連動することに対する「第三世界」の側からする異議申し立てが、それ自体英語でなされたことを皮肉とはいうまいが、英訳さえ読めばそれで世界文学を股にかけて論じ得る北米の大学研究環境と、翻訳は机の下でこっそり読んであくまで授業では昔ながらの原典訳読訓点返り点の儀式が、ご本尊のご威光の相対的・絶対的な低下にもかかわらず、依然として続行されている日本の大学の勉学環境との格差には、ひとり英語帝国主義めいた説明では納得できない、文化的屈曲が潜んでいる。このどちらの土俵に乗るかで様相は一変し、またその情報流通も、とても同一水準での互恵的交換ではない。両者は〈他者〉なのである。

それぞれの国の東洋学なり Asian Studies なるの伝統は、日本国内でしか通用しない国文学・国史学とはもはや独立したディシプリンである。ひたすら日本国内向けシステムに忠実に「出世」した正教授はたいがい博士号をお持ちではない〈異者〉だから、国際的派遣には資格のうえで抵触する。〈他者〉知らずの制度上の鎖国体制の歪みがここに噴出し、いまや米国の日本研究の若手は、

引用しても点数にならない日本での学術出版には見向きもしない。逆にいまや日本人が日本文学・文化研究で博士号を取得するためにも、合衆国をはじめとする「外国」で、その公用語、その論文作法に応じた論文を提出するほうが「国際的」に有利だからだ。文学、政治学、倫理学を問わず日本人専門家が欧米の日本研究書の翻訳に追われ、それらが日本の学会からはしばしば白眼視され無視されながらも学術賞に輝くご時勢である。

学問の国際化といった掛け声とは裏腹に、学術業績の通話可能性の許容度は専門化の進行によってかえって低下しかねない。「日本研究」をめぐり、作業言語の覇権争い、典拠となる文献の翻訳作業をその「前線」として、研究者集団のあいだにかえって互いを〈他者〉として認知することすら許さぬ断絶状態がひそかに準備されつつあるようだ。

研究の成果がどの言語で記述されるか、その場合の典拠となるテキストには何語が用いられるのか。いささか場違いな設問と取られる向きもあるが、これは「文学における他者」を論ずる場合の暗黙の前提として、「他者」を規定するゲームの規則そのものを言語的に支配してしまうだけに看過できない。日本語で日本文学を論じているかぎり、作品言語と分析言語が同一で透過性も高いために見落とされることなく、例えば日本語作品を英語で論じる場合には、両者の反りの合わぬ異質さや不透明感から、かえってある種の障害として立体的に意識に上ってくる場合がある。これこそ〈他者〉の出現と呼びたい瞬間だが、しかし今度は英訳されたものを英語で論じることに自足するようになってしまえば、そうした貴重なもどかしさは再び見失われ、せっかくの〈他者〉もまた消滅してしまうだろう。

ずれとしての〈他者〉

しかしこうしたさまざまな文化間の認識のギャップやすれ違いとして、いわば否定的に析出せざるをえぬ差異の「あそび」（マージン）にこそ、〈他者〉の領分ならぬ「余地」を認めようとする機運もようやく熟してきた（参照「シンガポールで読んだ（漱石の）「こゝろ」」「無限大」八九号、一九九一年。のち新曜社より平川・鶴田編『漱石の「こゝろ」』として刊行）。比較社会学者の指摘を俟つまでもないが、おのおの文化は適切な対人距離の感覚をもっていて、「自己」の広がりや「他者」への許容度も文脈によって収縮・拡大する。いまだに「人権」が個人よりも社会に属すると考えるのが「健全」な中国人は、北米大陸の基準からすれば「個人」意識未発達ということにもなるが、逆に家庭崩壊を招く個人主義など中国人から見れば「人倫」に悖るだろう。例えばこれらのふたつの文化圏の作家が日本社会の対人距離を描写した場合に、両者はどのようにされるか。そのずれを説明する共通語は存在するのか。ないしこれらふたつの文化圏の読者が日本社会の対人関係を描いた日本の小説に翻訳を通して接したとき、両者いかに異なった違和感を抱くだろうか。米中双方の読者の読みのずれは、米中の作家の描写したずれと、どのようにずれているのか。そもそも翻訳とはそうした違和感を、母国語読者には存在しなかったのだから排除すべき雑音として前もって中和しておくべきなのか。それとも外国人作家なら意図的にもそうするであろうように、日本人にはこ

く普通の感覚も、これをあくまで異文化的差異として、異質なるものとして際立たせるのが翻訳者の使命なのか。

こうしたのつびきならぬ選択の狭間にたたきされているのが翻訳者であり、「ヘンな外人」ないし「日本人じゃなくなった日本人」と蔑称される国籍不明人種である。日本国家そして文学がとりわけ大切にすべきなのがこうした〈他者〉であるはずなのだが、彼ら／彼女らは往々にして、出身地でも *tanizitei* したとか *tanizist* (豊化) だとかと称されて、もはや同類とは見なされなくなる。「外人」はウチのことには係わるべきでない存在であり、また係わらぬかぎり「外人」たりうる。その則を越えた瞬間こうして同化と排除の図式ではもはや割り切れなくなった存在／意識にこそ、〈他者〉が出現する契機を把えたいし、そうしたどっつかずの存在にこそ共感を寄せたい。だが、そんなヘイズレモノの梁山泊は、いわば文化的な「不法滞留」の禁を犯さねば、とても「日本文学」のなかに留まることはできそうにない。とはいえ二十一世紀の、もはや「日本」では括られぬ「他者文学」の可能性は、こうした脱領域の治外法権 *extraterritoriality* にしかないだろう……

文化翻訳者の〈他者〉たる使命——おわりにかえて

ある小説があつて、それが日本語によつて読まれることをほかの特定の民が耐え難く感じる、という事態があるとす。日本という国の言論の自由が恨まれているわけではない。日本という国境の内部において憲法が保証している自由の行使が、その外部からみればある種の権益にたいする侵害と見なされる。もし日本文学のなかに、その名にふさわしい〈他者〉が出現したとすれば、「文学」の約束事そのものを危機に瀕せしめるこうした存在へも最小限の考察がなされねばなるまい。普段その存在すら気づかれぬものだからこそ。

輸入翻訳が国内事業にはとどまらぬ「思わぬ」——というのが日本の「国際感覚」欠如の如実な証拠で、むしろ「当然の」——国際的波及効果を及ぼした希有なケースがある。サルマン・ラシユデー「悪魔の詩」日本語翻訳者暗殺をめぐる現出した事態である。輸入一方の日本国内の国際問題傍観者意識と、何が日本語の世界に輸入され流通するかがそれ自体で、国境を越えて拡がるイスラーム共同体にとって高度に政治的な意味をもつと考えるイスラーム圏の宗教意識と。その両者の齟齬から結果した、一種の文化摩擦の一件——その意識の齟齬はまごうかたなき〈他者〉の出現だ——では、その翻訳事業に「学者」としての使命の命ずるままに携わった(つまり表面的には文学的テキストの生産主体ではない)一翻訳者の生命が、奪い合いの対象と認識された。

センセイショナル好きの週刊誌が取り上げたほかには、外交上の配慮も働いたものか、この翻訳者の暗殺は(日本ペンクラブの慎重な声明はとにかく)「文学」の世界ではほとんど議論の対象にもならなかった。日本特有の自粛の事勿れ主義も作用したものか、「差別表現糾弾」という「声なき声」にあやかた「良識」という名の〈他者〉の闖入によつて、ある作家が「断筆」を宣言するにいたつた経緯にもまして、大手マスコミは臭いものに蓋の扱いでこの件に深入りすることなくやり過ご

したに等しい。〈他者〉の出現を拒む隠微なる「言葉狩り」が進行する、世紀末極東の一見平和で、しかし経済不況が社会の文化的活力までも直ちに圧殺してしまう軽薄な、管理過剰の情報均質国家。そうした闘争回避の自閉的閉塞状態を前にして、日本の「文学」の営みだけはまがましい〈他者〉の出現を許す「特異点」となってイスラーム圏と西欧との利害対立の狭間に「介入」し、世界に対して「発言」すべきである——「悪魔の詩」訳者の果たせぬ望みは、まさに外国文学の日本語への翻訳を通じてそうした「日本の国際的使命」を覚醒させるにあった。それが不幸にして日本ではすぐれて〈他者〉的な振舞いであつたがゆえに「文学」の世界では黙殺同然に扱われたことを最後に確認して、この拙い〈他者〉論序説を閉じようと思う。

註

(1) 〈他者〉の自覚をもった作家として正宗白鳥をあげる大嶋仁の論旨は尊重するにせよ、この見解は一步誤るとキリスト者ないしはキリスト教をはじめとする一神教と対決した人格——背教者、無神論者——にとつてしか〈他者〉は出現しない、とする論点へとすり替わるおそれがある。大嶋が依拠するレヴィナスの哲学がこの一神教の枠組みを前提としていることも言を俟たない。翻れば近代西欧的と概括される「自我」形成が「未完成」なままで、「市民」としての「主義主張」をする心得のない「日本の主体」によって執筆され、もっぱらそうした「不完全」な主体ばかりが登場する「日本文学」は、権利問題として〈他者〉を欠いた文学とも定義されうる。それは市民ひとりひとりを互いに〈他

者〉と規定してそこからあらゆる人間関係を想定する契約観に支えられた社会の文学が、その定義からして徹頭徹尾〈他者〉の文学であるのとは対極をなす。市民権を獲得した人間が〈他者〉たりうる風土の文学において、市民権なき存在がはたして〈他者〉たる権利をもって表象されるのか、という問題と、そもそも市民たる自覚の「未発達」な社会に出現する「外人」、「異人」は、その市民意識ゆえに〈他者〉たりうるのか、という問い——このふたつの問いの擦れ違いにこそ、「文学の〈他者〉」論はまず拘泥すべきではないだろうか。

(2) より詳しくは、オギユスタン・ベルク『空間の日本文化』宮原信訳、ちくま学芸文庫、二一—二四頁。および濱口恵俊『日本らしさ』の再発見』日本経済新聞社、一九七七年、六〇頁以下、を参照。

(3) 中上健次・柄谷行人「小林秀雄をこえて」、『文藝』一九七九年八月号。その検討としては中村三春『小林秀雄をこえて』——言葉とジャンルの闘争』『國文學 解釈と鑑賞』別冊「中上健次」一九九三年、一四七—五二頁。また本文の主張と一見矛盾する立論として、野口武彦「小説の史論——小説ジャンルの文学史と文学論」、『文学』一九九四年冬、五—一六頁、は作品を閉じる記号の消滅に近代小説の成立があるとの逆説を指摘している。

(4) そもそも『文学論』における「文学」の内実を定義する場合、漱石がひたすら拘泥したのは、周知のように「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種のもの」であることだった。小森陽一はこれを根拠に、西欧の literature の伝統および当時の大英帝国での公用言語に匹敵するものとして漱石の意識にあったのは「漢学」という表意文字による書記言語でこそ

あれ、けっして「遅れた日本」の文学などではなかったと、主張する（小森陽一「夏目漱石と『文学論』」、『学士会会報』八〇〇号、七八頁以下を参照）。漱石にとって、日本文学は西欧文学の〈他者〉ですらなかったのだろうか。

(5) 本件については、拙稿「寛容の否定的能力」小堀桂一郎編『東西の思想闘争』中央公論社、一九九四年、を参照。

編者紹介

鶴田欣也 (つるた きんや)

1932年東京生まれ。プリティッシュ・コロンビア大学教授。

著書：『Approaches to Modern Japanese Novel』(Sophia Univ. Press), 『日本近代文学における「向う側」——母なるもの性なるもの』, 『川端康成論』(以上, 明治書院), 『漱石の『ころ』——どう読むか, どう読まれてきたか』『アニミズムを読む——日本文学における自然・生命・自己』(以上, 共編著, 新曜社)。



日本文学における〈他者〉

初版第1刷発行 1994年11月18日

編者 鶴田欣也

発行者 堀江 洪

発行所 株式会社 新曜社

〒101東京都千代田区神田神保町2-10多田ビル
電話(03)3264-4973(代)・FAX(03)3239-2958

印刷 星野精版印刷

Printed in Japan

製本 イマキ製本

ISBN4-7885-0505-3 C1091

執筆者紹介

(執筆順)

小谷野敦 (こやの あつし)

1962年茨城県生まれ。大阪大学言語文化部専任講師。

著書：『八犬伝綺想』(福武書店)ほか。

稲賀繁美 (いなが しげみ)

1957年東京都生まれ。三重大学人文学部助教授。

著訳書：『歌麿』(新潮社), プルデュール『話すということ』(藤原書店)ほか。

竹内信夫 (たけうち のぶお)

1945年大阪生まれ。東京大学教養学部教授。

著訳書：『スタンダード仏和辞典』(大修館書店), バンゲ『自死の日本史』(筑摩書房)ほか。

上垣外憲一 (かみがいと けんいち)

1948年長野県生まれ。国際日本文化研究センター助教授。

著書：『雨森芳洲』(中公新書), 『鎖国』の文明論』(講談社)ほか。

佐伯順子 (さえき じゅんこ)

1961年東京都生まれ。帝塚山学院大学助教授。

著書：『遊女の文化史』(中公新書), 『文明開化と女性』(新典社)ほか。

佐々木英昭 (ささき ひであき)

1954年鳥取県生まれ。名古屋工業大学助教授。

著書：『夏目漱石と女性』(新典社), 『「新しい女」の到来——平塚らいてうと漱石』(名古屋大学出版会)ほか。

池田美紀子 (いけだ みきこ)

1942年東京都生まれ。慶応義塾大学講師。

訳書：『小泉八雲——明治日本の面影』(講談社学術文庫, 共訳)ほか。

コーディー・ポールトン (Cody Poulton)

ヴィクトリア大学助教授。近代日本文学。

遠田 勝 (とくだ まさる)

1955年東京都生まれ。神戸大学国際文化学部助教授。

著書：『小泉八雲——回想と研究』(講談社学術文庫, 共著)ほか。

中村和恵 (なかむら かずえ)

1966年札幌市生まれ。帝塚山学院大学専任講師。

論文：『ナショナルイデオロギカル・セクシュアリティ——パトリック・ホワイツ Twyborn Affair (1979) を例に』(『オーストラリア研究』2号)ほか。